弁天様略記・その後

利根川東遷・古利根川の変遷

川島邑の誕生

杉戸宿経緯

はじめに

今から三十五年前の、昭和四十七年九月に「弁天様略記」を発表しました。手書きでコピー印刷・配付し、その翌月に増刷、計七百部を配付。一応の評価を宮代全町内各位より頂きました。

一番印象に残っている比評としては「この本を出して一番喜んでいるのは、弁天様ですよ」と言われた言葉でした。そのせいかどうか、なんとなく弁天様に守られているような気がして、町内の氏神さまでもあり、信心を深めております。

発行当時は、駅前地区の弁天・桜木地区の事だけを中心として考えて、川向こうの杉戸地区の事は、他の町の事でもあり、考えも及ばず触れもしませんでした。しかしよくよく考えてみますと、利根川は両地区の間を流れ、そして毎年のように変流していたことでしょう。

そして、その本流の中心は、現在鉄道が通っている当たりかと考えておりますが、夏の大雨時は、現在の古利根川あたりまで、そして大洪水の時は、現在の杉戸地区南川用水路跡の「みなみ川散策路」当たりまで川幅は広がり、一様に水害を被った地区同士でありますので、関係の深い町だと言えます。

今回はそのために、利根川の流路変遷及び東遷・古利根川の変遷と整備・杉戸宿の経緯・川島邑の誕生等を含めて、「**弁天様略記・その後**」として、ここに発表・紹介致す次第であります。

内容については、五百年近くも前の話、資料も証拠も無いわけであり、すべて情況証拠による私の推測が多い次第ですので、不十分な点が多々あるかと考えております。各位のご指摘・ご批判をお待ち致しております。

平成十八年九月吉日

島村　繁夫

川島地区は清地村所属か

川島地区が出来た頃の利根川は、現在鉄道が通っている辺りを流れていたようで、そのため同地区は川の左岸に位置して、杉戸宿寄りであったと、利根川の自然堤防の在り方からも考えられます。

河畔砂丘（自然堤防の比較的大型な所）は南流の場合は流路の左側に出来ており、東流の場合には右側に出来る傾向があります。（下段の図参照）

又、自然堤防は平地全体に出来ており、比較的高く堤防状態を作っている所が河畔砂丘と呼ばれて、区別されているようです。この河畔砂丘（自然堤防を含めて）が出来た時代は、砂丘の砂から見つかる遺跡遺物から、主に平安時代末期から鎌倉時代頃にかけて出来たものだと言われております。

このため川島地区の誕生時期は、徳川氏が江戸宿に入府した天正十八年（一五九〇年）以降ではないかと推測されます。

「杉戸宿の経緯」の年代表を見ても、徳川家康の江戸入府と同時に来た、徳川家臣団一族の二、三代後の子孫のひと達か、或いは宿場設置後に、利根川の流れの中で十五年に一度位はあったと推測されていた洪水（昭和二十二年《一九四七年》の洪水

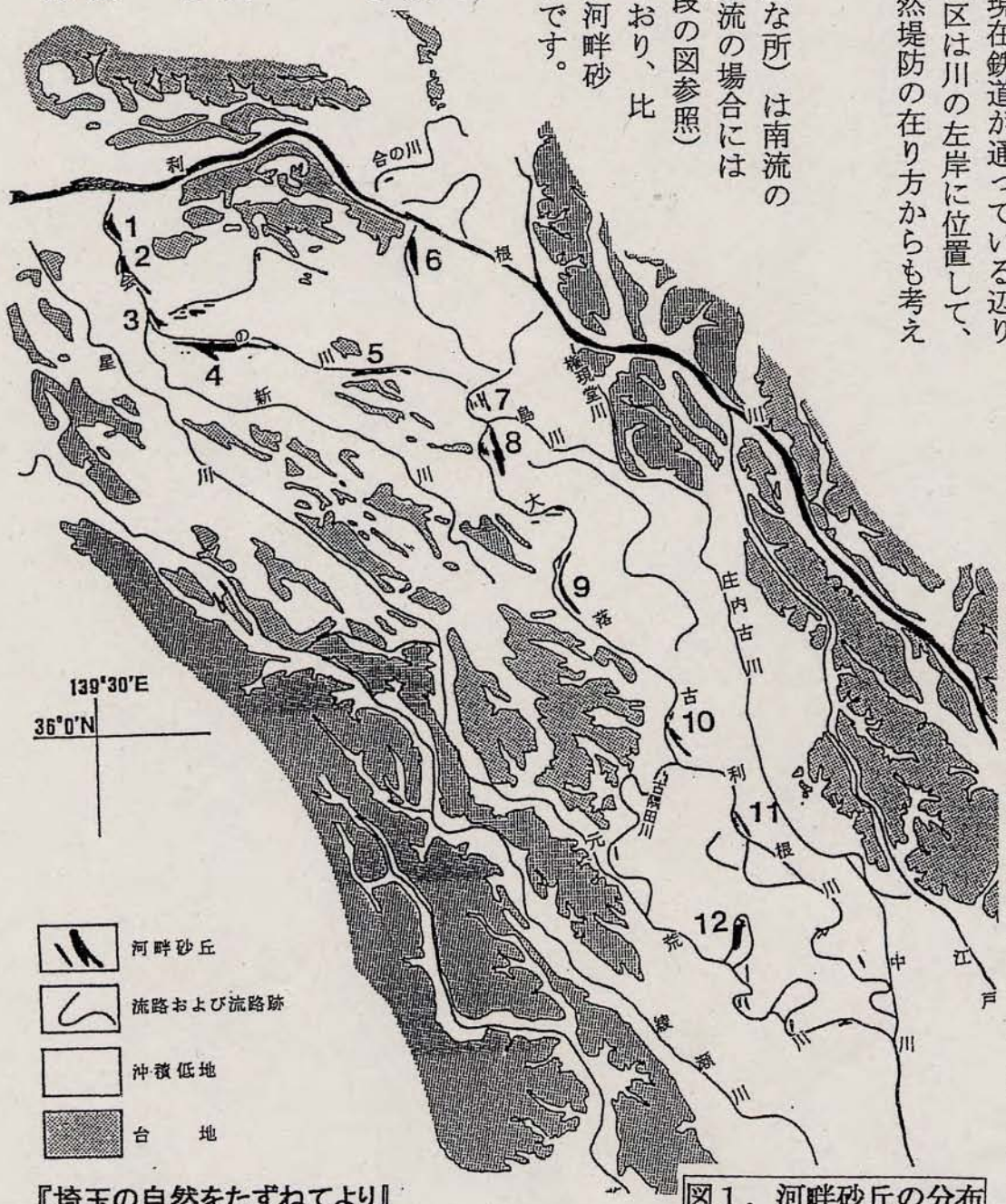


図1．河畔砂丘の分布

『埼玉の自然をたずねてより』

『埼玉の自然をたずねてより』

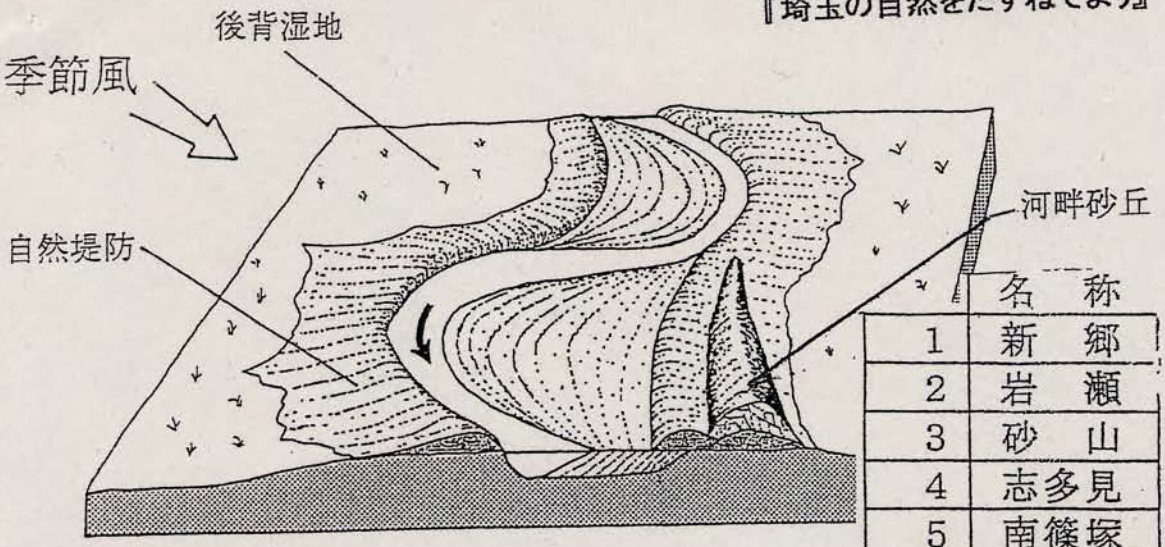


図3　河畔砂丘のでき方（模式図）

図1を見ると，河畔砂丘は川が西側に張りだして蛇行する東側か，北側に張りだして蛇行する南側にしかありません。また，砂丘をつくる砂を観察してみると，粒のそろい具合が非常によいことがわかります。砂丘の分布や砂粒のそろい具合などから考えて，これらの砂丘は北西の風によって吹き飛ばされ，ふるい分けられた砂がつもってできたものと考えられます。

また，河畔砂丘ができた時代は，砂丘の砂から見つかる遺跡遺物から，主に平安時代末期から鎌倉時代ころにかけてできたものだということがわかります。

（前頁の説明）

	名　称
1	新　郷
2	岩　瀬
3	砂　山
4	志多見
5	南篠塚
6	原　道
7	高　柳
8	西大輪
9	高　野
10	小　淵
11	藤　塚
12	袋　山

時を参考）の時にも、いつも小高い島のように水の上に顔を出している場所、「川の中の島」を見て、そこへ当時の百間領内の、宿・山崎方面、及び同じく清地村に住んでいた人達の中から、一部の者（次三男）が住み着き開墾を始めたのが、川島地区（邑）の始まりではないかと考えられます。始めは開墾・耕作だけの通い仕事だったかも知れませんが……。

いずれにしても、利根川東遷後の古利根川になってからの年代当たり、一六〇〇年前後かと考えられます。もちろんそれまでも隣接地区である杉戸（杉渡）や清地地区は、それぞれの地名は使われていたでしょうが、宿や村という呼び方が使われ始めたのは、正保元年（一六四四年）に作成された『正保武蔵国絵図』に記入されていますので、その前頃からかと思われます。

川島地区は、利根川の東遷以前元和七年（一六二一年・三八六年前）古利根川になる前は以上の理由から杉戸宿の隣清地村に所属していたのではないかと考えられます。当時の利根本流は、今の鉄道線路当たりを流れていたと考えられるため、同地区は利根川の**左岸**にあったと判断出来るからです。当然ながら今の駅前地区は、段丘状態であったと考えられます。

近津神社の氏子に

そのためか、川島地区（含む切戸地区）の人たちは、現在の杉戸町にある「近津神社」の氏子になっております。同神社の氏子地域は、上清地・中清地・下清地に川島地区を含めた四地域の計

千戸であったと伝えられております。同神社の造営年代は、一六八四年（貞享元年・利根川東遷三十年後）と記録にあり明治六年（一八七三年）に清地村村社となっております。

以上の点を種々勘案してみますと、川島地区の誕生は、一六〇〇～一六三〇年前後かと推測されます。

利根川東遷当時は、流れの本流が現在の古利根川に変流していたため、川島地区は今度は、川の**右岸**に位置し岩槻藩百間領に属して、そのまま明治維新後の廃藩置県まで百間領川島村（邑）として存続していたと考えられます。しかし、清地村との付き合いは、当然続いていたと思われます。

その後百間村は、明治九年新たに、百間（三六一）・東村（八〇三）・中村（四二二）・金谷原組（二六六）・西原組（五三二）・中島村（五〇一）・蓮谷（一五一）と合併し、人口三〇三五人として発足し、川島地区は字百間となりました。

杉戸町は同じく、杉戸宿（一七三二）・清地村（九七一）・倉松村（三七七）と合併し人口三〇八〇人として発足しました。

須賀村は、須賀（七五八）、和戸（六二八）、西久米原（五三三）、東久米原（三九九）、国納（二八五）が合併し、人口二六〇三人で発足しました。

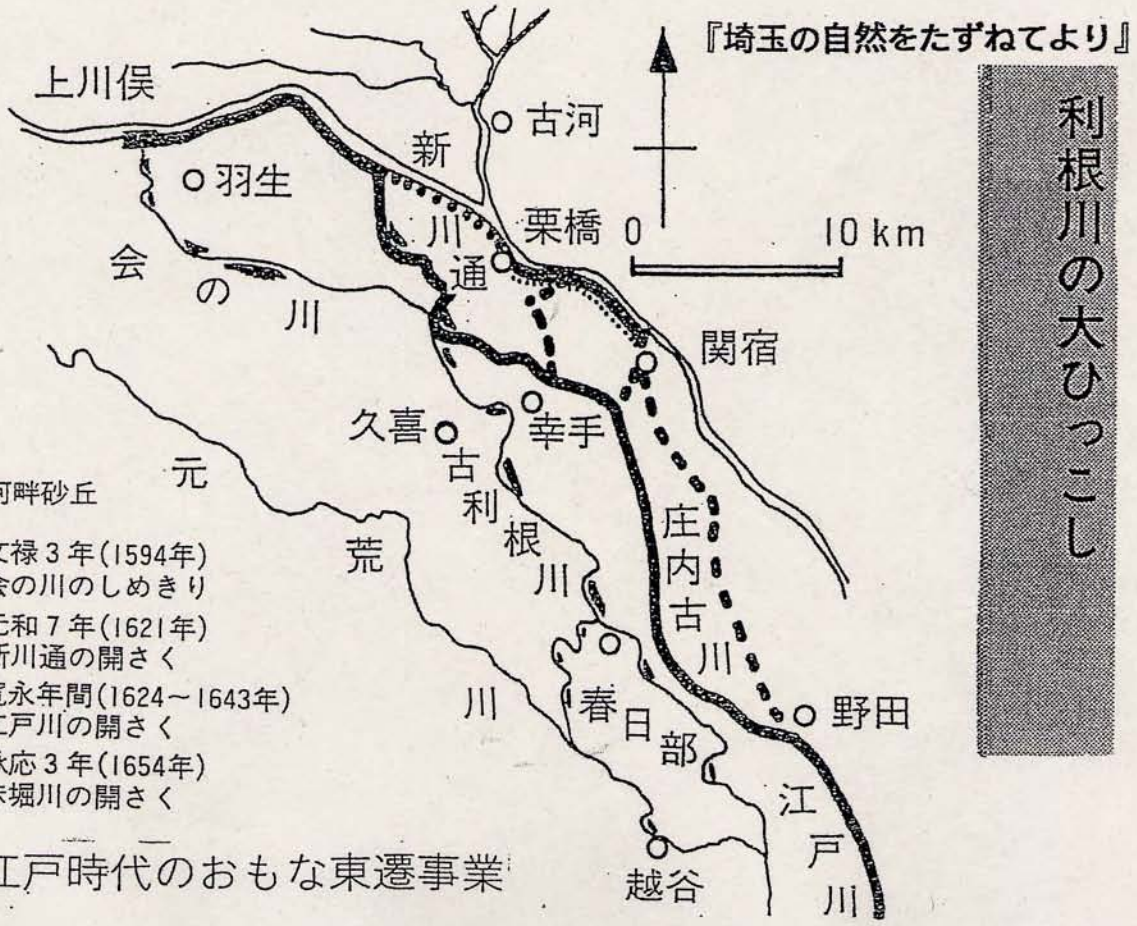
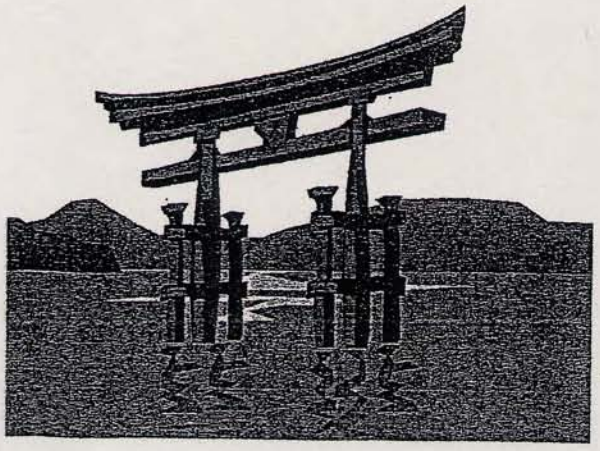


図　江戸時代のおもな東遷事業

川島地区誕生年代資料

天正１８年（１５９０）	徳川家康江戸入府
慶長　５年（１６００）	関が原合戦
〃　８年（１６０３）	徳川時代始まる
〃　９年（１６０４）	一里塚策定
元和　２年（１６１６）	宿場設置
〃　７年（１６２１）	利根川、権現堂川～庄内古川～太日川と流路変更 古利根川となる
寛永１１年（１６３４）	鷺谷家一番古い墓石現存
承応　３年（１６５４）	赤堀川開削完成・利根川鹿島灘へ変流さる（東遷）
〃　〃　（〃　）	島村家一番古い墓石現存（鷺谷家墓石より２０年後）
延宝　４年（１６７６）	一庵坊に庚申を祀る
天和　２年（１６８２）	池上家一番古い墓石現存（鷺谷家墓石より４８年後）
貞享　元年（１６８４）	近津神社造営、上清地・中清地・下清地及び川島地区千戸氏子となる
貞享　５年（１６８８）	深井家一番古い墓石現存（鷺谷家墓石より５４年後）
元禄１０年（１６９７）	尾花家一番古い墓石現存（鷺谷家墓石より６３年後）
享保　２年（１７１７）	一庵坊庵祖一庵法師、９月１７日寂す
〃　７年（１７２２）	大高家一番古い墓石現存（鷺谷家墓石より８８年後）
元文　４年（１７３９）	一庵坊二世覚霜一庵法師、１１月１１日寂す
寛政　元年（１７８９）	弁財天石碑川岸に祀る（百間邑川島請中二十人にて）
文化　２年（１８０５）	一庵坊三世円瑞一庵法師、１２月７日寂す
〃　４年（１８０７）	一庵坊四世一庵探道権妙弥、８月１９日寂す
明治　６年（１８７３）	近津神社清地村村社となる



年表を元にした私考説明文

① 鷺谷家・島村家・池上家・深井家・尾花家・大高家の一番古い現存墓石には作成年代に差があるが、当時としては石の墓石は貴重品であったと考えられ、作れればよいが、それが難しかったため当面木板で間に合わせていたため、残っていなかったと考えられる

② 上記六家は、相前後して川島地区へ移住したと考えられるが、墓石の作成年代には、何らかの事情（鷺谷家が大家族で比較して収入が多かった・本家からの援助・身内に石屋関係者が居た等）があったため前後８０年程度の差が出来たのかと思える

③ 杉戸宿場の設置が１６１６年、その前から人家はあり、その人達は利根川が滔々（とうとう）と流れていて、１５年に一度程度と言われていた洪水の時でも、川面に土地が出ている島状の状態を長い間見ていて、勇気ある人達（次三男と思える）が、いつ頃「川の中の島」へ移住し開墾をはじめたのか？という点

- 一番古く残っている鷺谷家墓石の１６３４年を元に考えると、その前１０～３０年位の時期、いわゆる１６００年～１６２０年頃
- 古利根川になった１６２１年頃

④ いずれにしても、利根川が流れていた時では、いくら勇気があっても、人の移住は万一を考えて、通い開墾程度の耕作はあったと考えられるが、移住そのものはなかったと考えられよう

⑤ 利根川の流路変更があり、古利根川になってから六家が中心となって、年代的にはまちまちではあっても移住したと考えるのが常識的かなと、推測している

⑥ いわゆる元和７年（１６２１年）以降数年後の１６２５～６年頃かと推測できる

⑦ 赤堀川の掘削が完了し、通水開始して利根川を鹿島灘へ流路変更したのが、承応３年（１６５４）であるが、その２０年前の鷺谷家墓石が残っているのを見ても、少なくとも３０年前には移住していたと思えるので寛永２年（１６２５）頃との推測が成り立つと言えよう

⑧ すなわち、古利根川になってから、本格的な移住は実施されたと考えられる

⑨ ただ、勇気ある一部のひと達のなかから、利根川が流れていた時から移住し耕作していたということも考えられるが、いかんせん４００年以上も前のこと、情況証拠を元に推測するしかないわけで、各人の想像力に任すほかないと考えている。